

# 「名越時敏（左源太）」小考（一）

## ― 姓名をめぐって ―

内倉 昭文

はじめに

黎明館（調査史料室）では、原則として毎年二冊『鹿兒島県史料』を刊行（「旧記雑録分野」と「幕末維新分野」）しているが、そのうち後者は平成二十二年度から継続して「名越時敏史料」を刊行している<sup>①</sup>。

名越時敏（左源太）については、一般に幕末期に奄美の豊かな自然や風俗等を描いた「南島雑話」の作者（の一人）として知られているが、本稿では時敏自身についての詳細な記述は省略する。また、時敏の息子時成（主税・平馬）は薩摩藩英国留学生の一人として、慶応元（一八六五）年イギリスに渡っている（翌年帰国）が、こちらも同様である。

この「名越家」は鹿兒島では比較的によく知られた存在であるにもかかわらず、その姓の読み方については、情報発信元の諸機関や各種刊行物、説明・案内看板等によりまちまちである。すなわち、一般的に目にする読み方は、「なごし」及び「なごえ」、「なごや」の三つである。

現在からそう遠くない一九世紀の人物であり、またその御子孫の方々が複数いらっしゃるという状況において、これはいささか奇異なこともあり、幾ばくかの困惑をもたらしているようにも思われる（例えば「西郷」（隆盛）を「にしごう」と呼ぶ人が、どのくらい存在するだろ

うか）。

もちろん、はっきり確証が得られない中で、敢えて読み仮名を付けざるを得なかったという場合もあるであろう。しかしそうであるならなおさら、その中で史料的にもある程度以上確実な「裏付け」がとれる読み仮名を採用するのが適切であろう。また、史料的な「裏付け」がとれるとれないにかかわらず、その御子孫の方々の声にきちんと耳を傾けるのは道理である。本稿作成の主要目的の一つは、その適正な読み仮名の確認、及びそれを周知徹底することに、多少なりとも貢献することである。

なお、『鹿兒島県史料』のタイトル（「名越時敏史料」）の方に読み仮名を付けていないのは、確証ある読み方が分からないというわけではなく、他の類似書多数の例及び従前よりの慣例に従っているだけであり、また総てのケースで必ず確証が得られるという保証もなく、その結果読み仮名を付けたりはずしたりという不統一なことが起こるのを避けるという判断もあるということ、念のためお断りしておきたい。

## 一章 「名越」の読み方について

### 第一節 印刷物・説明版等に見る諸説の状況

以下、現在見受けられる各説について紹介する（順不同）。なお筆者自身の力量及び時間不足等から、対象の文献類は目に触れた主要なものに限定されるという点御了承いただきたい。また、実際には敢えて読み仮名を付していないものの方が多いという点も、確認しておきたい。

#### 1 「なごし」説

私自身の目に触れた（歴史関係の）書籍類の中で、時敏（家等）の姓に「なごし」と読み仮名を付している主なものは、以下のとおりである。<sup>③</sup>

①川崎大十『「さつま」の姓氏』（高城書房、平成十二年）

同書の中で、川崎大十氏は時敏の家系を「清和源姓と称する名越氏がある」として「なごし」という読み方を示している（一方で「桓武平姓」の方は「なごや」として紹介している）。

②『国書総目録』岩波書店、昭和四十四年（「名越時敏日史」等の項）

③富田仁編『海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ株式会社、一九八五年（「名越平馬」の項）

ちなみに、「電話帳」の「名越」の項を見ると、（その掲載順から見て）全二十五件中「なごえ」が七件、「なごし」が一六件、「なごや」が二件となっており、鹿児島市近辺では「なごし」という読み方が一番多いということがわかる（一方、鹿児島市内で「名古屋」及び「名見耶」等「名越」以外で「なごや」と読むと思われる姓は確認できない）。

もちろん、昨今の大きな流れとして、電話帳への掲載を拒否する家庭

も少なくないと聞くし、また、若年層を中心に固定電話を持たず携帯電話だけで済ます人も多いと思われる。従って電話帳はかなり不完全な資料とは言えよう。実際に一九八九年版の電話帳で見ると、鹿児島市内の「名越」（読み方不詳）は三十五件（県全体では一三五件）となっており、<sup>⑤</sup>掲載数がほぼ二十年でおおよそ三分の二に減少している。しかしながらそれでも、ある程度の傾向は探れるのではないだろうか。

#### 2 「なごえ」説

同じく私自身の目に触れた書籍類の中で、時敏等の姓に「なごえ」と読み仮名を付している主なものは、以下のとおりである。

①前掲『鹿児島県姓氏家系大辞典』角川書店、平成六年（「名越左源太」の項）

②西郷隆盛全集編集委員会編『西郷隆盛全集第六卷』（大和書房、昭和五十五年）（「関係人物略伝」）

③『鹿児島県の不思議事典』新人物往来社、二〇〇三年（徳永和喜「薩摩民俗学・博物学の祖といわれる名越左源太の業績とは？」）

ただし、私が目にした範囲で判断すると、鹿児島市（関連機関・施設・関係者等を含む）が発行及び何らかの形でそれに関わっている可能性も考えられる様々な印刷物（小冊子、パンフレット類を含む）や説明板等、同じく作成・発信等に関わっていると思われるインターネット等の情報では、総じて「なごえ」説に立っているのではないかと判断されるため、特に印刷物の数としては非常に多数に及んでいる。<sup>⑥</sup>

一方、時敏のかつての「野屋敷」付近（現鼓川町）に立つ「名越左源太屋敷跡」の説明板にははっきりと「なごや」と振ってある。これは私

自身、鹿児島市（教育委員会か？）が何らかの形で関わったものではないかと推測しているが、このいきさつ等お知りの方は御教示いただきたい。であれば、この「矛盾」はどう解釈したらいいのであろうか。

### 3 「なごや」説

この説をとっている書籍類は最も多く目に付くが、以下それら主要なものを示す（順不同）。

- ①『日本庶民生活史料集成第一巻』三一書房、一九六八年（原口虎雄「南島雑話」解題）
- ②國分直一・恵良宏『南島雑話 幕末奄美民俗誌』（平凡社東洋文庫、一九八四年）
- ③『鹿児島大百科事典』南日本新聞社、昭和五十六年（亀井勝信「名越左源太」の項）
- ④『国史大辞典』吉川弘文館、平成元年（原口泉「南島雑話」の項）
- ⑤『沖繩大百科事典下巻』沖繩タイムス社、一九八三年（恵原義盛「名越左源太」の項）
- ⑥『明治維新人名辞典』日本歴史学会編、昭和五十六年（「名越左源太」の項）
- ⑦『幕末維新人名辞典』新人物往来社、一九九四年（松尾千歳「名越左源太」及び寺尾美保「名越時成」の項）
- ⑧黒田安雄「幕末外交と「南島雑話」の成立」（『鎖国日本と国際交流 下巻』吉川弘文館、昭和六十三年）
- ⑨名越護『南島雑話の世界 ―名越左源太の見た幕末の奄美―』（南日本新聞社、二〇〇二年）

⑩石上英一「歴史と素材」（『日本の時代史 30 歴史と素材』吉川弘文館、二〇〇四年）

⑪難波経健「⑨鹿児島 近思録崩れ」と「お由羅騒動」―御家騒動はなぜ起こったか（『江戸時代 人づくり風土記46ふるさとの人と知恵 鹿児島』農山漁村文化協会、一九九九年）

⑫塩満郁夫編『鹿児島県史料拾遺（XXVI）鹿児島城下絵図（文政・天保・安政）索引』（鹿児島県史料拾遺）刊行会、平成十四年）

⑬今村規子『名越左源太の見た幕末奄美の食と菓子』（南方新社、二〇一〇年）

⑭鹿児島県高等学校歴史部会編『鹿児島県の歴史散歩』（山川出版社、二〇〇八年）（注「名越どん屋敷跡」と記載）

⑮下野敏見『鹿児島県の伝統文化シリーズ3 奄美、吐噶喇の伝統文化』（南方新社、二〇〇五年）

⑯天津幸夫『奄美・小宿集落誌 ―小宿の名越左源太と実徳・佐和雄の出会い―』（天津福祉会、平成二十二年）

⑰野元教朗「名越左源太翁と私」（『吉野史談』三十四号 吉野史談会、平成二十二年）

⑱鹿児島県立大島高等学校南島雑話クラブ訳・野尻純一編集『挿絵で見る「南島雑話」』（奄美文化財団、平成九年）

一方、参考までにインターネットの情報では、「ウイキペディア」の「名越左源太」の項をはじめとして、過半は「なごや」ではないかと思われるが、「なごえ」及び「なごし」も散見される。

では、市町村等の状況はかがであらうか。

鹿児島市の場合（関係者など鹿児島市が何らかの形で関わっていると

思われる場合)は、前述したとおり、基本的に「なごえ」説に拠っていると判断される。

これに対し、「南島雑話」の舞台となった奄美の市町村においてはどうか。奄美群島内市町村の正式な史誌等において、敢えて名越時敏に読み仮名を振っているものは、管見では余り見られない。ただ奄美の関係者・研究者等の手になる出版物には「なごや」説に拠ったものがとてもよく目に付く(逆に「なごえ」「なごし」説に拠ったものは、管見ではほとんど確認できない)。また、奄美市のホームページ(「文化財・史跡案内」)では、はっきり「なごや」と読み仮名が振ってある。

また、つい最近いちき串木野市に「薩摩藩英国留学生記念館」がオープンしたが、当然ながら留学生の一人として時敏の息子の時成(平馬)についても紹介している。その展示も含めて一連の準備作業・広報等の中で散見される情報の範囲内に限って言えば、こちらの方も「なごや」説を採っていると判断される。

## 第二節 各説の検証

以下、それぞれの説について、具体的に検証をしてみたい。

### 1 「なごし」説

この説の有力な典拠の一つとされているのは、おそらく前述の『さつま』の姓氏』であろう。同書は編著者の長年に渡る並々ならぬ努力の賜物であり、同類の書籍としてはある程度の評価を得ているものである。

同書では前述のとおり、時敏の流の名越家を「清和源姓」と述べ、(おそらくそこから導かれると判断された結果として)その読みを「なご

し」と確定している。この「清和源姓」との記述の根拠(の一つ)は、おそらく多くの「薩陽武鑑」が始祖「恒渡」を「源」(姓)と表記しているためではないだろうか。

これについては、時敏が自著「常不止集」(一之下、天保十二(一八四一)年)において、各家の系譜を書き上げた所の名越時敏家の箇所、自身「名越右膳元祖源恒渡」と記述しているが、一方でその後「委細ハ外ニ有之」と、<sup>⑧</sup>含み<sup>⑨</sup>も持たせるような書き方をしている。これは他家のところでは見られないが、時敏自身が「武鑑」か何かを書写しながら、自身の家のところでは、なにがしかの<sup>⑩</sup>疑念<sup>⑪</sup>も抱いていた可能性はなからうか。

これに対し、戦前の名越時敏研究の<sup>⑫</sup>バイブル<sup>⑬</sup>とされる永井龜彦「高崎崩の志士 名越左源太翁」(松下志明編『南西諸島史料集Ⅱ』南方新社、二〇〇八年)によれば、時敏の死後間もなくの明治十四(一八八一)年に建立された彼の墓碑には「平姓名越氏」と刻んである<sup>⑭</sup>ことである。ただこの墓碑については、後述する時敏の御子孫の内村氏の言及び筆者が実際に名越時敏家の墓所(鹿児島市の坂元墓地)を調べた所では、所在不明となっているので、念のため東京大学史料編纂所が所蔵する「虎嘯輯録 墓碑誌銘部」記載の「名越時敏君墓誌」でも確認した。この墓碑には「名越時成謹書」と刻んであり、息子である時成が家系の基本的な点を間違えることは、通常は考えにくい。

また、名越時敏家の家紋は、いわゆる「披三本傘」<sup>⑮</sup>である(複数の「薩陽武鑑」及び鹿児島市坂元墓地の墓石、さらに御子孫の内村氏からの情報等による)。これに関して、『日本紋章学』は、『参考太平記』を引いて、十四世紀の鎌倉幕府滅亡頃の状況として、「(注 北条氏流の)

名越氏は当時すでに三本傘紋を用いていたことがわかる」と紹介している。また、千鹿野茂編『家紋でたどるあなたの家系』（続群書類従完成会、平成七年）では、同様の紋を「軸違い三本傘」として「江馬氏 桓武平氏北条氏族〔寛政譜20 姓氏家系〕」と記述している。<sup>10</sup> ちなみに、時敏の御子孫の内村氏によれば、時成（平馬）留学時の変名「三笠」は、名越家（北条家）の家紋に由来することである。

これらのことを勘案した場合に、名越時敏家が自身「平姓北条家」の流れであることをある程度以上強く意識していたことが推測できる。

なお、平姓北条氏の流れの名越家は、北条氏本流同様本来通字が「朝時―時章―公時―時家」というように「時」の字であったことは明白であるが、名越時敏家は「恒渡―恒索―恒篤―盛尚―盛胤―時敏―時成」となっており、「時」の字を使用したのは、（ほぼ）時敏とその子時成だけである。<sup>11</sup> このことは、名越時敏家がどの時点で「名越流北条氏」を意識したのが窺える可能性もあるが、一方で、「歴代制度」あるいは「列朝制度」等によると、薩摩藩では（でも）度々藩主（一族）や将軍（一族）等に使用された文字に関して、名前への使用に制限を加えていることがわかる。例えば寛政三（一七九一）年には、「時」の字などを実名に使用することを「遠慮」するようにとの通達が出されている。<sup>12</sup> また、これに関連する文化七（一八一〇）年の通達も見受けられる。<sup>13</sup>

ちなみに時敏は文政二（一八一九）年の生まれである（「名越時敏日史」文久二（一八六二）年元旦の記述<sup>14</sup>等参照）が、これらの通達が示す時期は、おおよそ時敏の父あるいは祖父の代にあたりと推測される。以上の状況と左源太への「時」の字使用との関連はいかがであろうか。

ちなみに、『さつま』の姓氏<sup>15</sup>では系図は時敏で途切れており、それ

以降の御子孫（家系図を含む）とは没交渉の模様である。

ここで少し話が逸れるかも知れないが、名越家のルーツについて、興味深い情報がある。

念のため、名越家が鹿児島に移り住んで薩摩藩（島津家）の重臣として重用されるきっかけとなったのは、遡ると一族の娘「お須磨」が（後の）薩摩藩主島津吉貴に見初められ、次期藩主となる継豊を生んだことである。その島津家との由緒はしばしば取り沙汰される。一例として、「高崎崩れ（お遊羅騒動）」で多くの関係者に切腹等の重い処分が下された一方で、密談場所を提供し密談自体にも加わった疑いも掛けられた時敏に対し、遠島で済まされた理由とも言われる。

この「お須磨」の出自に関しては、鹿児島県立図書館に所蔵される『薩摩銘鑑 全』にもしろい記述がある。それは、名越家について「當家世々江戸高輪之浦谷山之人豆腐ヲ以家業トス右膳恒渡代妹ノ故ヲ以鹿府士ニ列セラレ家ヲ起ス」というものである。<sup>16</sup> ちなみに、前掲『さつま』の姓氏<sup>17</sup>では、「始祖恒渡の出自不詳」としている。

もちろん似たようなことは何も名越家に限ったことではないが、「源姓」にせよ「平姓」にせよ、藩主の実母の家として、それ相応の「家系図」がいつの段階か調えられて行なったことも想像される。少々厳しい表現ではあるが、前掲『さつま』の姓氏<sup>18</sup>の言を借りれば、「現在遺されている系図類は、殆どが『贗系図』と言われていて。一四、五代ぐらい前までは正しいとされながらも、それ以上遡れば殆ど『贗系図』である。これは自家の系図を権威づけるため、有名氏族・著名人物に結び付けるための作為が施されているから」である。この点から言えば、名越家がもともとどちらだったのかという考察はあまり意味がない。ただ、

どちらに位置付けようとしていったのかという流れについては、重要で興味のあるところでもある。

残念ながら（その存在自体も確認できていないが）現時点で名越家の本家御嫡流に伝わる正式な「家系図（家譜）」は未見であり、もし現在でも存在するのであれば、機会を捉えてぜひ見てみたいものである。

最後に一応の結論として、「源姓」との確かな典拠を示せないのであれば、現時点では息子の名も記された時敏の墓碑の「平姓名越氏」との記述やその流に特色的な家紋を重視するのが筋であろう。「平姓」であれば、川崎大十氏も「なごや」との読み方を示したはずである。実際に、「桓武平姓北条義時（中略）の子朝時が、名越邑に住み名越氏を称する」（前掲『さつま』の姓氏<sup>17</sup>）とし、「なごや」と表記されている。

ここで少し「源姓」との記述から離れて、別な視点から考察してみた。川崎氏は「なごし」の所で、「二」として時敏家の「分家」の「彦太夫流」についても取り上げている。これに関しては、その御子孫から黎明館に寄託された「要用留」などの史料がある<sup>18</sup>。それを見ると、この流の始祖は、時敏家の始祖恒渡の弟高豊である。この御子孫の方（寄託者）は、黎明館のデータベースでも電話帳でも「なごし」と登録されている。そのため、筆者が直接その方に確認したところ、「本当は「なごや」であり、実際祖父の代までは本来の「なごや」を名乗っていた。しかし正しく読んでもらえないので、父の代から「なごし」で通している、というような回答を得た。ひょっとすると、このことが川崎氏の「なごし」読みに影響を与えたのであろうか。

ちなみに、これとよく似た話を、直系ではないが時敏家の親族と思われる「名越戸十郎家」の御子孫の方からお伺いした。すなわち、本当

は「なごや」であるが、あまりに間違えられる（漢字を正しく書いてもらえない）ので、息子からは「なごし」を使用しているとのことである。なお、戸十郎は小林等の地頭として赴任していた時敏のもとに、息子時成の海外派遣の情報を伝えた人物である（『名越時敏日史』第四十四）。

なお少々余談になるが、インターネットの情報等から判断すると、鹿児島県内ではほぼ唯一（？）の存在ではないかと想像される地名としての字名「名越<sup>19</sup>」（鹿児島市小山田）は、『角川日本地名大辞典46 鹿児島県』（角川書店、昭和五十八年）によると「ナゴシ」と読むようである。

最後に、「名越（なごえ）」の地名は「難越（なごし）」の意ともいわれ（『国指定史跡名越切通保存管理計画策定報告書』（逗子市教育委員会、二〇〇一年）ているとのことであるが、これと「なごし」説との関連はいかがであろうか。

## 2 「なごえ」説

（1）<sup>20</sup>発祥の地<sup>21</sup> 近辺での状況

残念ながら、この説のはっきりした典拠は確認できていない。「名越」の読み方としては、「なごし」同様一般的なものであることは、間違いないであろう。

考えられる一つの可能性としては、名越一族のルーツとされる相模（鎌倉等）の地名としての「名越」が、現在一般的に「なごえ」とされていることが関係しているのではないか。「中世武士の家名」名字は、その本拠地＝本領の地名をとるのことも多い」（永原慶二「姓氏概説 中世の姓氏」（『角川日本姓氏歴史人物大辞典』角川書店）という関係から、以下その具体例を、名越流北条氏の姓の読み方も併せて紹介

する。

これに関しては、文化庁の「国指定文化財等データベース」の「名越切通」の箇所や、神奈川県逗子市教育委員会が平成二十四年に発行した、『史跡 名越切通 整備事業に伴う発掘調査報告書』、及び『鎌倉市史 総説編』（吉川弘文館、昭和三十四年）、さらには『角川日本地名大辞典14 神奈川県』（角川書店、昭和五十九年）、及び『日本歴史地名体系 14 神奈川県』（平凡社、一九八四年）、その他地元鎌倉市内外の歴史関連書の多くが「なごえ」と読み仮名を振っている。

おそらく、地名としての「名越」は、現在「なごえ」と読むのが通説（定説）<sup>シ</sup>と言つてよい状況かも知れない。さらには、人名としての「名越」も、こと鎌倉時代の（名越流）北条一族の姓名としては、『国史大辞典』（吉川弘文館、平成元年）を始めとして、多くの歴史（関連）書が「なごえ」説を採用している。

一方、白井永二『鎌倉事典』（東京堂出版、昭和五十一年）では、「名越」及び「名越氏」の所で「なごえ」とした上で、その説明で「ナゴシ・ナゴヤとも読ませ、那古谷の字もあてる」としている。一方、「鎌倉名越の三善善信の邸にあったといわれる文庫」（同書）の「名越文庫」には、（典拠不明ながら）「なごやぶんこ」と読み仮名を付している。

また、吉田東伍著『増補 大日本地名辞書第六巻 板東』（富山房、昭和四十五年（初版は明治三十六年））には、「那古谷<sup>ナゴヤ</sup>」の所で、「又名越<sup>ナゴエ</sup>に作る」とある。『日本大百科全書』（小学館、昭和六十二年）でも、「名越家」に「なごしけ」と添えた一方で、「なごえけ」「なごやけ」とも読む」と記述している。

さらには、太田亮『姓氏家系大辞典』（角川書店、昭和三十八年）で

は、「名越」の項の所で前述の三つの読み方を示した上で、「1 桓武平氏北條氏族 相摸國鎌倉郡名越邑より起る。一に那古谷に作り、此の氏も古訓・多くナゴヤと註す」と記述している。

また、同氏『新編 姓氏家系辞書』（秋田書店、昭和四十九年）によると、「鎌倉郡名越より起こ」（同書）つた「名越氏<sup>ナゴエ</sup>」について、「補」として「ナゴエ、ナゴヤに通音」とある。さらに、「浪越氏<sup>ナゴシ</sup>」の所では同じく「補」として「ナミコシに通音。名越氏と同じ」とあり、「千葉氏族の方の」<sup>ナゴヤ</sup>「奈古屋氏」の所でも同じく「補」として「ナゴヤに通音」とある。なお、著者は「通音」の説明として、「音が通じて用いられる」（中略）意を要約した語である」（同書）としている。

## （2）他地域の状況

ここで鎌倉時代における名越流北条氏の守護職の状況等にも少し目を向けてみたい。

『国史大辞典』（吉川弘文館、平成元年）によると、この流の一族は、加賀・能登・越中・越後・大隅・安芸・尾張各国（順不同）等の守護であった。そこで、時間的な制約上限られた文献のみの調査で申し訳ないが、各国に関係する県の状況を見てみたい。

まず『角川日本姓氏歴史人物大辞典17 石川県姓氏歴史人物大辞典』（角川書店、平成十年）では、「名越朝時」のところで「なごえともとき」と記載する一方、「那古屋・名越」のところで「なごや」と記載し、続けて「加賀藩士に、那古屋因幡（注 後述する名古屋山三郎の父か）を祖とする那古屋氏がある。のち名越氏に改めた」と述べる。さらに、この家の家紋は「三本傘」と記述している。

この流の名越氏に関しては、東京大学史料編纂所が所蔵する「名越家

先祖由来書」(名越三徳氏所蔵本の写本)に興味深い記事がある。すなわちそれは「一名越故右門代迄那古屋ト相調来り候処 松雲院様御代右門ハ名越尾張守高家之嫡流ニ候間名越ト可相調管之旨度々 御意御座候ニ付二字ニ相調申由御座候得共故吉太郎幼少ニ而三ノ一被下被召出来之者共心得違仕候哉名越屋ト屋ノ字付申ニ付私江跡目被仰付候御名越尾張守高家之嫡流ニ候間名越ト可相調管之旨 松雲院様御代度々 御意御座候段拜聴仕罷有候(略)」というものである(一部旧字等を改めた)。

また、同じく『角川日本姓氏歴史人物大辞典16 富山県姓氏歴史人物大辞典』(角川書店、平成四年)では「越中の守護に任じられた北条一族の名越氏」(同書)としての「名越」の項では「なごえ」と記載する一方で、同じ一門の「名越時有」・「名越時兼」のところでそれぞれ「なごよときあり」・「なごよときかね」と読んでいる。

さらに、『三百藩家臣人名事典第四卷』(新人物往来社、昭和六十三年)によると、長岡藩士の「名児耶軍兵衛(なごや くんべゑ)」の解説の所で、『長岡諸士出身録』によれば貞享三(注 一六八六)年十月に名越与次衛門が軍法者として、二百石で召し出されているのを始めてしている。その子林之丞の代の時、名越姓から名児耶姓に改めている」と記載されている<sup>18)</sup>。

加えて、同じく守護職の記録が残る尾張の状況について垣間見ると、(鎌倉の名越をルーツとする平姓名越氏は、北条義時の子(泰時の弟)の朝時を始祖とし、時章と続くが)この時章は「寛元三年(一二四五)四月八日尾張守に任じ、同四年二月二十二日に守を去り、以後尾張前司として(注 『吾妻鏡』に)所見する。弘長三年(一二六三)十一月二十二日の時頼の卒去によって出家し、以後尾張入道見西と呼ばれて

いる。『吾妻鏡』における尾張前司の初見である宝治元年(一二四七)十二月五日条には名越尾張前司とあり、次の同年十二月二十九日条の名越尾張前司とともに、名越を姓として用いた例である」(川添昭二「北条氏一門名越(江馬)氏について」(『日本歴史』第四六四号、一九八七年一月)とある<sup>19)</sup>。

一方、清水正健編『莊園志料』(角川書店、昭和五十三年)には、尾張国に「那古屋莊」が「正平十九年(注 一三六四年)の舊記に見ゆ」とある。また、同じく同書には続けて「今郡中に名古屋村あり、押切、榮、廣井、露橋四村を併せて、名古屋莊と云ふ」とある<sup>20)</sup>。果たして名越氏と尾張国との関わりが、「ナゴヤ」読みに影響した可能性はいかがか。

一方安芸国については、『日本歴史地名大系35 広島県の地名』(平凡社、一九八二年)によれば、「比和町森脇」に「大鉄山師」の名越家があった。この名越家に関連しては、上西薫・上西繁子著『名越家に関する資料 その一、伝承を主として』(溪水社、平成二年)という小冊子を閲覧する機会を得た。詳細は省くが、同書は専門の歴史研究者ではなさそうであるが、その一方で名越一族の御子孫と思われる人物の手になるものである。その中でおもしろい記述があるので紹介したい。それは、「(注 鎌倉の名越家が) 関東・中部・関西の三つにわかれ 中部に行つた者はなごやと稱して、今日名古屋の地名の元になった。京、西方、に來た者は なごしと名乗つた」というものである。さらに別箇所では文献を参照したかたちで「関東に残つたものは「なごえ」と記述している。大変大雑把にとらえるならば、感触としては明らかかな間違いとは必ずしも言い切れないであろうが、実際にはケース・バイ・ケースであろうし、私自身詳細な調査は行っていないので、これ以上敢えて深入りはしない。



なおその一方で、同書には「広島県東城町の近くに名越（なごえ）」と云う所もある」とも記述されている。

先に「那古屋荘」については触れたが、『角川日本姓氏歴史人物大辞典23 愛知県』（角川書店、平成三年）では、「名古屋」の項でそれ以外に「今川家家臣名古屋藏人高信・名古屋因幡守敦順」について触れ、その同族として「阿国歌舞伎で知られる名古屋山三郎」（同書）についても紹介している。

この名古屋山三郎の流については、既に紹介したとおり、東京大学史料編纂所に名越三徳氏の所蔵する「名越家先祖由来書」の写本がある。さらに、同所に所蔵される「名越三徳氏所蔵文書」は、寛永四（一六二七）年の「那古屋藏人」宛のもの（『知行宛行状』）の写しである。<sup>21</sup>

一方、『新聞附録 名越各業獨案内』は、明治初期頃の名古屋の商工業者を紹介した小冊子であるが、その凡例によると、「書名の「名越」は「名古屋」の謂である」とのことである。<sup>22</sup>

以上、多少羅列的な紹介になり、まとまりを欠いてしまった感も否めないが、今まで述べて来たようなことから、「名越」と「名古屋」（「那古屋」）の間に、「なごや」という読み方が共有されているということは、ある程度明らかであろう。

最後に、前掲『姓氏家系大辞典』によると、「伊豆國田方郡奈古屋村（葦山附近）」より起こった橘姓の「奈古屋（ナゴヤ）」があるとのこと、その証左として「東鑑」等を挙げている。同書では他に相模・下総・肥前などにその地名が存在すると記述している。これに関連して、NPO 法人伊豆学研究会編『伊豆大辞典』（羽衣出版、平成二十二年）では、「な

ごやーごう 奈古谷郷」の項のところ、「（前略）「本朝高僧伝」に上杉憲顕が「豆州奈古谷」に国清寺を建立したと見える。これは南北朝初期のことで、以後『鎌倉大草紙』『永享記』などに「伊豆の名ごやの国清寺」のように国清寺に関して多く登場し、名越とも記された」と述べる。果たしてこの「奈古谷郷」と「名越」の「なごや」読みとの関連はいかがであろうか（ここは北条氏出身地の近隣地ではあるが）。

### （3）「電話帳」に見る人名の分布等

さらに、参考までに電話帳で現在の読み方の状況について調べてみる。「名越」姓の発祥の地とされる鎌倉市近辺の電話帳（二〇一三年一月版、以下同じ）で調べてみると、思いのほか「名越」姓が少ないことがわかる。もちろんこれは鎌倉幕府の滅亡＝北条氏の滅亡（ないし凋落）と決して無関係ではないのかも知れない。しかし鎌倉市において、電話帳記載の「名越」姓が皆無であることにはいささか驚かされる。<sup>23</sup> ちなみに近辺の市町村（逗子市・三浦市・横須賀市）に広げて調べてみると、「名古屋」（一件）「名古屋」（二件）「名児耶」（一件）は存在するが、「名越」は皆無である。念のため、神奈川県を中心都市の横浜市まで広げてみて、ようやく「名越」姓が十件登場する（ただし各区ごとの掲載で、数が少な過ぎるため読み方の推定ができない）。一方「名古屋」姓は六件、「名児耶（名児耶も含む）」は四件となっている。

「名古屋」姓など明らかに「なごや」と読むと思われる姓の割合の多さは、ひよっとすると前述の太田亮『姓氏家系大辞典』の記述と何がしかの関連があるのかも知れない。一方、筆者自身は仮に一つの可能性として、「名越」姓から、「なごや」読みとしてより一般的な「名古屋」姓等に（全てではないが）変化していったのではないかと推測し

ている。

また、先に「名越」の地名は「難越」の意ともいわれ（前掲『国指定史跡名越切通保存管理計画策定報告書』）ていることを紹介したが、「地名」（人名）も）においては、このような「漢字」や「読み」の变化は、全国的にも決して珍しいことではないのではないか。

以上のような事を総合的に判断すると、必要以上に現在の鎌倉近辺での「名越」の「なごえ」読みに拘り過ぎない方が良くように思えてくる。

#### （4）「名越」姓の読み方の歴史的な変遷

ここで少し視点を変えて、「名越」の読み方についての歴史的な具体例を見てみたい（前項同様地名と人名の両方併せて取り上げる）。

確かに現在の「名越」は、鎌倉市近辺での地名や、（現在の御子孫とは関係なく）鎌倉時代の人物としての読み方としては、ほぼ「なごえ」が通説（定説）<sup>23</sup>となっている。

では、この「なごえ」読みは、鎌倉時代まで遡って歴史的に普遍的なものであるのだろうか。

実は、少し丹念に調べてみると、そうではない状況が見えてくる。以下、その具体例を示す。

#### ①「太平記」の記述

名越一族の名前が頻出する歴史書としては、最も有名で広く流布したものが、この鎌倉幕府滅亡前後から南北朝の動乱期を描いた「太平記」であろう。専門外の分野でもあり、本稿ではその内容等詳細には深入りしないが、複数系統ある「太平記」の中で、長谷川端校注・訳『太平記①（全四冊）』（小学館、一九九四年）によると、「日置本」では名越に「ナコヘ」と訓が付されており、「寛永八（注 一六三一）年版」では

「ナゴヤ」との訓が付されているとのことである。

また、後藤丹治・釜田喜三郎校注『日本古典文学大系34 太平記一』（岩波書店、昭和三十五年）は、その解説によると、「寛永無刊記版を主とし他を参照しながら訓を施すことに務め」たものであるが、そこでも名越に「ナゴヤ」と読み仮名を振っている。また、國民文庫刊行會が明治四十二年に出した『太平記 全』も「流布版本」が底本であるとされるが、そこでも「なごや」と付している（ただしこれについては、「緒言」で「元和の片假字本を原とせり」とする一方で、（便宜上）「総振假字にせる」としている）、その原本（底本）自体まで確認しないと、同書の編著者の主観<sup>24</sup>書き入れ等の影響も完全には排除できないが・・・）。

一方古写本のほうはどうか。以下は順にマイクロフィルム画像及びインターネット情報にてこれまた申し訳ないが、所謂「島津家本」についても、「國學院大學図書館」本にしても、（その当時の自然な事として）「名越」にわざわざ読み仮名は付されていない<sup>25</sup>。

#### ②「和漢三才図会」の記述

「和漢三才図会」は「江戸時代中期（注 奥付によると正徳三（一七一三）年）に刊行されたわが国はじめての図説百科辞書として記述的出版であり、かつその記述内容もよるべき資料として高く評価されている大出版である」（樋口秀雄「寺島良安と「和漢三才圖會」」（『和漢三才圖會』東京美術、昭和四十五年）。ここでは「相模国」のところで、はっきりと「名越切通」と記述している。

ちなみに、時敏はその自著「群書輯録」（十九）に「倭漢三才図會」の抜書を取り上げており、この所に目を通して可能性も考えられる。

③「新編鎌倉志」の記述（白坂克編『新編鎌倉志（貞享二刊）』影印・解説・索引）汲古書院、平成十五年 による）

同書は「徳川光圀が延宝年間（一六七三―八一）に臣下（中略）に命じて編纂させた鎌倉に関する地誌。貞享二年（一六八五）刊。」（『国史大辞典』吉川弘文館、昭和六十一年）である。

これを見ると、「名越ナゴヤ或ハ作二那一」「名越殿ナゴヤノキミ」「名越切通ナゴヤノキリドオリ」などあり、土地の所謂「古老」に聞いたものか或いは何か他の典拠に基づくものかは不明であるが、光圀の頃には鎌倉の（地名・人名としての）「名越」については、ほぼ確実に「ナゴヤ」読みが存在したことがわかる。

なお、同「汲古書院本」の「はじめに」のところに、「ただし本書（注「新編鎌倉志」）を読むためには、やはり貞享二年版自身が必要で。地名・人名・事項など、現在では忘れられた江戸時代の読み方も書かれているからです」とあり、まさしくこれは、「名越」の読み方についても示唆しているように思われる。

④「高木元『荊萱後傳玉櫛笥』―解題と翻刻―」の情報

これはインターネット上に公開された情報にて失礼するが、それによると、同書は曲亭（滝沢）馬琴の著作に葛飾北斎の画が付された文化四（一八〇七）年の刊本のものである。それを見ると、「なごや」或いは「なこや」の読み仮名が振られた「名越（の）切通」が見受けられる。一方これらに対し、これもまた広く読まれた『東海道名所図会』においては、鎌倉のところで複数登場する「名越」に「なごえ」と振り仮名を振っている<sup>(25)</sup>。

以上のようなことから、江戸期においては少なくとも「なごや」と「なごえ」の両方の読み方が混在していた可能性が強く窺われる。

以上、主に江戸期において刊本の形で出版される際に、当時既にある一定程度以上認知されていた地名や人名としての「名越」の「なごや」読みの振り仮名が、複数の書物に付されるに至ったということが言えるのではないか。そして総じて、写本ではなく刊本で出版されたものの影響力は、決して小さくないのではなからうか。

（その内容が古代に至るものであっても）多くの家系図が主に江戸期に「調えられて」いったことを勘案するならば、その江戸期にほぼ確実に「名越」の「なごや」読みが存在することがわかれば、それだけで十分であるかも知れないが、念のため次項でさらに遡って考察してみたい。

(5) 鎌倉時代当初の読み方についての再検討の必要性

前項から、現在の主な状況と異なり、少なくとも江戸期においては「名越」の「なごや」読みがある程度以上広く普及していたことがわかる。

であるならば、当然の帰結として現在の地元鎌倉近辺での「名越」の「なごえ」読みの「通説（定説）化」は、近代以降のことであることがほぼ確実であろう。果たしてそれはどのようないきさつで、またどのような判断で行われたものであろうか。

一つの可能性として、おそらくそこには、本来は「なごえ」読みが正しい、或いは当初（鎌倉時代）は「なごえ」読みが一般的だったという判断が存在するのではないだろうか。

筆者の狭い知見のみで判断すると、鎌倉時代の文献類において「名越」を含めて姓名に読み仮名を付したものはほとんど存在しないのではないかとも思えるが、筆者自身中世史及び鎌倉（相模）方面の歴史・地理等には全く明るくないので、どなたか事情を御存知の方は、是非御一

報いたいただきたい。

ただ一点だけ、「称名寺所蔵銅造宝篋印舍利塔裏落書」にある永仁四(一二九六)年の大火の記事に「(前略)ナコエノ入、ミナヤケテ、人四百人ハカリヤケシニケリ」とあることのみ確認できたが、もう少し情報を得る必要がある。

前掲の『増補 大日本地名辞書』では、名越山に「ナゴエ」と読み仮名を付した上で、「那古谷の東嶺にして、其切通坂は標高六十米突、田越村に通ず(以下略)」と述べている。「名越」と「那古谷」との関連については、既に見て来たとおりでである。この二つの「通音」が既に鎌倉時代から生じていた可能性は皆無であろうか。或いは極めて近接した(或いは内包した)地域の地名として、容易に混同され、「名越」の「なご(こ)や」読みが拡散された可能性はいかがであろうか。

また、これは単なる推測に過ぎないが、前掲の『名越家に関する資料 その一、伝承を主として』中の「(注 鎌倉の名越家が) 関東・中部・関西の三つにわかれ 中部に行った者はなごやと稱して、今日名古屋の地名の元もとになった。京、西方、に来た者は なごしと名乗った」及び「関東に残ったものは「なごえ」との記述が仮に正しいとすると、地元鎌倉近辺に「なごや」や「なごし」読みの「名越家」がいなくなり、(数は多くないながらも)近辺に残った「なごえ」読みの「名越家」の意見にのみ耳を傾ける(或いはその影響を受ける)という「偏った」状況の中で、判断がなされた可能性はないのであろうか。

もちろんこれらの点においては、筆者自身大して「素人」の域を出ていないので、はるかに御造詣の深い研究者の方々に、適切な御教示をいただきたいと思います。併せて、筆者自身機会があれば「机上の空論」に終

始しないためにも、現地での詳細な調査も実施できればとも願っている。

### 3 「なごや」説

この説を採用している書籍類が多いこと理由の一つには、前述の原口虎雄氏の著作物の影響があるのではと推測している。氏が戦後一早く「童虎山房」に象徴されるように奄美(琉球)関係の史料収集に努力され、「南島雑話」及び「遠島日記」に象徴される名越時敏の人物・事蹟・史料などの紹介に尽力されて来たことと無縁ではないと思われる。詳しいいきさつは私自身の不勉強さ故知り得ていないが、氏はおそらく自身の研究に加えて、他の多くの(「先達」も含む)研究者や御子孫の方々との交流も背景として、「なごや」説を主張されるに至ったのではなかろうか。

ところで、結論から言えば私自身も現在ではこの「なごや」説が正しいもしくは最も「適切」である(一方で他は不適切)と確信しているが、その理由は何も前述の原口虎雄氏他の多数の著述だけに基づいたものではない。以下、具体的にその根拠を示したい。

①永井亀彦『高崎崩の志士 名越左源太翁』(昭和九年)の記述

同書では、「晩年翁は右の鞆鞆の野屋敷に移り住まれたから、其下の坂を世人は名越殿坂と呼んで居る」(松下志朗編『南西諸島史料集』II、南方新社、二〇〇八年)と振り仮名を付けて紹介している。<sup>28)</sup>

ちなみに、永井氏は主として戦前・戦後を代表する名越時敏研究の第一人者と目されている人物である。また、従来「南島雑話」の著者が左源太であるということを初めて解明された研究者であるともされている。但しこれに対しては、明治期の早い段階から既に奄美の研究者の間では

一時期「周知の事実」であった可能性も指摘できる<sup>29</sup>。同書が書かれた時期は、幕末〜明治期の頃の人物である時敏あるいは時成ら名越家について、今より鮮明にその記憶が地元に残っていたとしても、決して不思議ではない。

ここで前述したとおり、同所に立つ説明板のことが想起される。そこにははつきりと「なごや」と読み仮名が振ってある。この説明板がいつ立てられたか詳細は把握していないが、「なごや」が正しいと仮定すると)もし「なごや」以外の読み仮名が振ってあったとしたら、きっと地元の方(いわゆる「古老」と呼ばれるような方々)から設置者(鹿児島市?)に苦情も寄せられたことであろう。

②「慶應年間薩摩人士洋航談 明治三十九(注 一九〇六)年十月二十三日同君三田小山町自宅に於て男爵松村淳藏君談話寺師宗徳君記す」(『史談会速記録(合本二十四/復刻版)』原書房、昭和四十八年)の記述

そこには、「(注 洋行を命ぜられたる人々として)(変名) 三笠政之助(実名) **名古屋主税**(注 時成)」との記述が見られる。ちなみに、『史談会速記録』は戦前に存在した史談会の機関誌で、明治二十五(一八九二)年から昭和十三(一九三八)年にかけて刊行されたものである(『国史大辞典』吉川弘文館、昭和六十年 等参照)。

このような記述がなされた一つの可能性として、松村が口頭で「名越主税」と語ったものを、寺師が耳で聞いて「名古屋」と表記したものではないか。これは常識的に判断するならば、筆者が話者の発言を、「なごや」と聞き取ったことを示しているよう。

ちなみに、松村淳藏(市来勘十郎)は薩摩藩英国留学生の一人で、彼

が同じ留学生の名越平馬(時成)の名前を読み間違えるとは思えない。なお、寺師宗徳は市来四郎の甥にあたる人物と思われる、叔父である四郎と共に「史談会」の運営等に当たった人物である<sup>30</sup>。

③渡邊順編輯『大島誌要』(早稲田大学図書館所蔵)付帯の「大島全圖」の記述

その画像を含めてインターネット上の情報のみで、実物の調査は残念ながら未実施であるが、そこから非常に興味深い情報が見てとれる。同史料はその情報によれば、明治十二年五月「陸軍大尉長澤六郎」が「西郷陸軍卿閣下」(西郷従道か)に呈したもののようで、その付帯図の「大島全圖」には、その「編纂」者名に「鹿児島縣士族 大島名瀬方住 基俊良(注 印判あり)」と並んで、「鹿児島縣士族 鹿児島住 **名古屋左源太**(注 印判なし)」と記されている。「謄写」は鹿児島縣士族 大島大和濱住 久野藤喜隠(注 印判なし)。

もちろん時敏自身の印がないことや、「名古屋」と表記していることなどから、この図自体に直接時敏が関わったものではないだろうが、この元(の一つ?)となっているのは、幕末期時敏が何らかの形でその作成に関わったと推測される絵図(現在鹿児島県立図書館所蔵の「大島古図」か)であると思われる。

特に注目すべきは、明治十二(一八七九)年(注 「大島全圖」には「戸数明治十一年調」とあり)という時期である。これはまだ時敏が存命中(時敏は明治十四(一八八一)年没)であり、まさしく同時代の史料である。この点では、②の史料よりもさらに注目すべきものである。そしてそこに「名古屋左源太」と記載されていることの意味を、決して軽んずべきではない。可能であれば、機会を見て是非実物を調査してみ

たいと考えている。

一方、インターネットで検索すると、奄美博物館が所蔵する、時敏の役人福留宛書状（旧童虎山房保管）中の宛先に、「名古屋左源太様」という記述が見られるが、実際の史料で確認すると、これは間違いであり、「名越左源太様」である。これはそのインターネット画面から、「鹿児島大学附属図書館」の旧データベースが基になっていないかと思われるが、一方で黎明館が奄美の地元の方々と共同で平成一四（二〇〇二）～一六（二〇〇四）年度に実施した「奄美群島歴史資料調査事業」（のデータ、そのおおもとは調査カードか）に、同様の所謂ワープロミスと思われるミスが見られるので、おそらくその影響かも知れない。もしそうであるなら調査の実施主体の現在の責任者の一人として、深くお詫びして訂正させていただきたい。

なお、奄美博物館が多数所有する左源太宛（その役人宛も含む）の書状の中に、「名 左源太様」なるものが、複数見受けられる。これについては、当時名前の省略例は皆無ではないことや、いわゆる奄美の「一字姓」との兼ね合いなども一応は考慮する必要があるのかもしれないが、一つの可能性として、「なごや」と聞いた島の人が「ごや」に相当する字が容易に浮かばなかった可能性は皆無であろうか、詳細不明である。

④内村八紘「名越左源太と長男・時成（変名・三笠政之介）」（平成一三年）の記述

部分的に同じ内容のものが『鹿児島史談会』編集委員会、機関誌『鹿児島史談』四号（山田尚二、平成十二年）に掲載されており、そちらの方の題名には振り仮名は振っていない。しかしいずれも「結び」のところで「◎名越は、「なごや」とよみ名越家である。（なごし）とは、よま

ない」とある。内村氏は同書等によると、名越左源太の嫡男時成の二女アキの娘カネコの息子にあたり、左源太から見て玄孫（曾孫の子）にあたる。筆者は内村氏を含めて直接・間接的に複数の御子孫の方からの情報を得ているが、いずれも「名越」の本来の読みを「なごや」とされている<sup>(31)</sup>。さらに、これは直接お会いしたり間接的に聞いたり、インターネットで調べたりした結果であるが、時敏の子孫ではないが、同じく名越流北条氏の御子孫と言われる方のうち、鹿児島県内外において、実際に名越を「なごや」と名乗られておられる方も複数見受けられる。

また、これ以外にも原口虎雄監修『青潮社歴史選書3薩州島津家分限帳』（青潮社、昭和五十九年）では、その掲載史料中の「名越左源太」のところ「なごや」と読み仮名が振ってある。これはその状況から、原史料自体に振ってあるように思われるが、未だその原史料に接することができていないので、ここではその可能性に触れるだけに留めたい。

以上のような諸史料・文献や御子孫の主張等を十分に勘案した場合には、「なごや」説を採用すべきであることは明白であろう。それが常識的な判断というものである。

それでも「なごし」説や「なごえ」説を強く主張される方は、確実なその典拠を示す必要がある。そうでなければ、（少々厳しい言い方をさせていただければ）「なごし」説や「なごえ」説は、机上の空論に過ぎないと言えるであろう。

なお最後に、詳細不明ながら、「諸家大概」の「名越」の所におもしろい記述が出てくるので、参考までに紹介する。「一 平姓名越氏其先祖は秩父太郎重弘三男榛谷四郎重朝より系候重朝の子孫日州志布志の内槻野村に下り彼地を領し申候てより月野に改申候夫より代々彼辺に罷在

候其子孫月野大膳事 義弘公に致供奉関ヶ原より罷歸り候人数の内にて候御感状御知行被下候大膳後谷山に罷在候其養子は名越主水にて候此名越と改申候事月野氏名越の一族にても無御座格護仕系図は慥に秩父家より系候て月野代々在之候名越に改申事何故にて候哉再可考候但此系図の内を見申候に奈古屋と出入候処在之候是以改名越候哉と考申候」（『鹿児島県史料集（VI） 諸家大概 別本諸家大概 職掌紀原 御家譜』（鹿児島県立図書館、昭和四十一年））

この「名越氏」と時敏の家系との関係は不明であるが、「奈古屋」姓と「名越」姓との関係もかがわれて少なからず興味深い。なお、川崎氏はこれを前掲書で「二、谷山流」とし「なごや」とされているが、その御子孫か何かではないかとも思われる。「名越」姓で「高」の字を使用されている谷山在住の方も、「電話帳」では「なごや」と読むようである。

## 第二章 名越時敏の名乗について

ここでは、時敏の名乗について、簡単にまとめてみたい。

かつて鹿児島市に存在した名越時敏の「墓誌」（前掲『高崎崩の志士名越左源太翁』等参照）には、「君偉時敏、字棲鸞、号欽齋、平姓名越氏、称左源太、改兵部、後改泰蔵」という記述がある。

また、他の書籍類をひもとくと、「時行」（『見聴雑事録』・『遠島日記』・『雑記下書』等）・「源太郎」（『高崎くづれ大島遠島録』）・「右源太」・「篤烈」（『常不止集』・『続常不止集』等）、「盛貞」（『常不止集』等）、「時之助」（注 詳細不明、間違いか）（国立国会図書館所蔵『南島雑誌』（『国

書絵目録』掲載）などが見られる。このうち主要なものを、著作物への記名時期から古いもの順に示すと、おおよそ「篤烈」↓「時行」↓「時敏」↓「泰蔵」となる。また、「右源太」については（時敏の名乗りとしては）一般にはあまり聞き慣れない。これは彼が「左源太」と名乗るよりかなり早い段階において見られるが、彼の父（盛胤）がまだ「左源太」を名乗っていた時期とある程度重なっているのではないか。であれば、一つの可能性として、父との区別の意味もあつてのことではないかとも思われる。（逆ではあるが）同じようなことは、「薩陽武鑑」によれば、時敏より三代及び四代前の恒索（名乗りを「右源太」と記載）・恒篤（同「左源太」と記載）の場合にも見られる。ちなみに、時敏の著作「常不止集」（第二巻）によれば、恒渡の「渡」は「タ」、恒索の「索」は「モト」と読む<sup>33</sup>。さらに、「名越右源太」の名が刻まれた天保十一（一八四〇）年の石灯笼が、黎明館の近くに現存している<sup>34</sup>。

なお、このうち特に「篤烈」については、その読み方がわからない。諸橋轍次『大漢和辞典』（大修館書店、昭和三十三年）や児玉幸多編『くずし字用例辞典 普及版』（東京堂出版、平成五年）等からは、「篤」の字の読みとして「トク」「シゲ」「アツ」、「烈」の字の読みとして「レツ」「レチ」「ツヨ」「ヤス」「ツラ」が窺われる。これらのいずれかの組み合わせか、はたまたそれ以外の特殊な読み方なのか、皆目不明である（どなたかお心当たりのある方はお教え願いたい）。

また、「棲鸞」については、鹿児島県立図書館が所蔵する書幅等これが確認できる<sup>35</sup>。

なお、余談になるが、他に伊東家領内への「通行手形」に記載された一週間足らずの「仮名（偽名）」として、「越山右源二」がある（名越時

敏「鵜戸詣道の記」。

最後に、以上紹介した以外の名乗り（呼名）を御存知の方は、「篤烈」の読み方同様よろしければ当方まで御連絡いただけたら幸いである。

## おわりに

本稿は題名のとおり、「小考」ということでも論文とは呼べないものであろうが、筆者なりに時間と力量の許す範囲内でまとめてみた。

既に述べたとおり、現在でも名越左源太時敏（あるいは名越時成など）の姓名を「なごえ」や「なごし」という、（確実な根拠が示せないのであれば）不適切であると言える読み方が間々見られる状況は、早急に改善するべきであろう。特に鹿児島市が（少なからず関わった形で）、奄美群島内の複数の市町村（関係者）やいちき串木野市（関係者）等と異なり、一般の観光客等のみならず結果として小中学生まで広く「巻き込んだ」形で、不適切と判断される「なごえ」姓を多用しているとも思われる現状は、将来に向けて少なからず憂慮される状況である（もし万が一鹿児島市の直接・間接的な関係者が実際には一切（一人も）関係していないのであれば、御一報いただきたい。その際には深くお詫び申し上げ訂正したい。なお、この点は本稿前掲の同様の記述も含む）。もし「なごえ」姓にあくまでも拘るのであれば、しかるべき関係者（機関）が、広くその典拠（根拠）を早急に示す必要がある。もし、確証はないが読み仮名を振らざるを得なくて（取り敢えず）「なごえ」或いは「なごし」としているのであれば、間違いを将来に繋げて行かないためにも、早急に是正されることを強く求めたい。

最後に、少々余計なことになるかも知れないが、筆者自身の正直な気持ち（感想）を一言申し述べておきたい。

敢えて特に明記はしないが、本稿で否定した「なごし」説や「なごえ」説について、それらを採用した著作物の中に、筆者自身大変お世話になり、また尊敬している研究者の方が、直接的あるいは間接的に関わった文献も存在するであろう。

一般に各著作物は、その時代的・時期的な状況・制約等の影響を、一定程度以上受けるのが常である。その一例として、今回の論考では、インターネットやその他のデータベース等から得られる書誌情報及び御子孫の情報等もフルに活用させていただいた。結果、貴重な情報の収集や調査時間の節約、或いは地理的制約の軽減等、筆者自身大変助けられた。このようなことは、少なくとも十年、いや二十年前にはほぼ不可能なことであっただろう。

そういう点では、先達の研究者の御努力と本稿でのそれと同列に評価するのは少なからず公平性を欠き、無理がある。現在に比べれば得られる情報量が格段に少ない中で、熱意を持って調査・研究に努力されたことに対する敬意は、失ってはならないであろう。

だがその一方で、客観的な「史実」の追求という点では、先達の研究者の方々の業績に遠慮する必要はない、いやすべきではないということも、また道理である。

最後に、筆者自身に対しても、もし本稿で示した以上の他説を裏付ける情報（あるいは「なごや」説を補完する情報）等が出て来た場合には、御遠慮無く御一報いただきたい。深く感謝申し上げますと共に、改めてきちんと対応させていただく所存である。



【注】

- (1) 内訳は黎明館のホームページを御覧いただきたい。
- (2) 内訳は次のとおり〔六〕は予定
- 名越時敏史料一 「名越時敏日史」
- 同 二 「名越時敏日史」「鶴戸詣道の記」
- 同 三・四 「常不止集」
- 同 五 「続常不止集」
- 同 六 「続常不止集」「岩瀬之玉」「嘉多美農水」
- (3) これ以外に、例えば各種団体発行の観光・史跡案内等パンフレットや小学校等作成の印刷物など、「なごし」の振り仮名を付したものは皆無ではないと思われるが、学術（関連）書として（時間や力量の許す範囲内で）筆者の目に触れた主要なものは、この三点である（以下同様）。
- (4) 「鹿児島・日置版／個人名」（掲載情報二〇一〇、二、九現在）
- (5) 『角川日本姓氏歴史人物大辞典46 鹿児島県姓氏家系大辞典』（角川書店、平成六年）による。
- (6) その結果であろうか、鹿児島市立の小中学校等作成の印刷物（副教材等も含む）等にも少なからずこの説が大きな影響を与えているのではないかと思われるが、仮に「なごえ」説が不適切であるとするならば、これは大変憂慮される状況であると言えよう。
- (7) インターネットの情報（「名瀬の史跡・文化財・石碑」）によれば、名越時敏の奄美での住居跡がある小宿の地元の人々（三人）が「なごし」と言っており、さらに「地元ラジオ放送のアナウンサーも番組で「なごし」と言っていた」とのことであるが、ひよっとするとこのよ

- うな状況故か、地元奄美市立小宿中学校の広報紙（と思われる）「根山麓」では、最初「なごしさげんた」と紹介していた。しかし後日同紙上で「なごやさげんた」と訂正している。これは地元奄美の現況（研究者・研究誌等の動向）を勘案した場合に、当然の帰結であろう。
- (8) 昭和九年発行のものも確認したが、当然基本的には同じである。
- (9) この家紋の呼称は、沼田頼輔著『日本紋章学』（新人物往来社、昭和四十七年）による。
- (10) 実際には『新訂 寛政重修諸家譜第二十』（続群書類従完成会、昭和四十一年）では、「江馬」のところで「家傳に、（中略）朝時がのちなりといふ」とし、「家紋 丸に三鱗 花菱 三本傘」としている。
- (11) 御子孫の内村氏からの情報及び墓所からの情報によると、時成以後現時点までにおいては、「時彦」という名のみであろうとも推測される。ただし一族に広げると、「名越戸十郎家」の御子孫によれば、「時敏」という名前も存在する。
- (12) 「島津家歴代制度」巻之二十九 一八五三号（『鹿児島県史料 薩摩藩法令史料集二』平成十七年）
- (13) 「島津家歴代制度」巻之二十九 一八七〇の2号（『鹿児島県史料 薩摩藩法令史料集二』平成十七年）
- (14) 『鹿児島県史料 名越時敏史料一』（鹿児島県歴史資料センター黎明館、平成二十三年）
- (15) 原口虎雄「遠島日記」解題（『日本庶民生活史料集成第二十巻』（三一書房、一九七二年）も参照した）。
- (16) 宮下満郎「名越彦太夫の「雑要用記」」（『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ七』月報 平成十年）及び同「戊辰・西南戦争と名越

彦太夫」(『敬天愛人』第17号 西郷南洲顕彰会、平成十一年)等参照。

(17) 少々余談になるが、『名越のあゆみ』(名越大正会、昭和六十三年)という名越部落の『記念誌』もある。

(18) この部分は森岡浩編『難読・稀少名字大事典』(東京堂出版、二〇〇七年)も参照した。

(19) これらに関連しては、北条氏研究会「北条氏系図考証」(安田元久編『吾妻鏡人名総覧―注釈と考証―』吉川弘文館、平成十年)や五味克夫「論説 名越氏と肥後氏」(鹿児島中世史研究会『中世史研究会 会報』三十号、昭和四十六年)なども参照したが、詳しくは触れない。

(20) 『莊園志料』には伊勢国の莊園として「名越御園」を記載しているが、残念ながらその読みについては触れられていない。

(21) 前者の方はインターネットでの画像公開が行われているが、後者の方は平成二十六年十二月段階ではまだ行われていない。

(22) 明治四(一八七二)年刊行のもの昭和五十九年復刻版を参照した。林屋正三の序文あり。

(23) これは御子孫からの間接的な情報ではあるが、このような状況を『打破』しようと、敢えて鎌倉市内に墓所を作られた「名越家」の方もいらっしやるとのことである。

(24) 「穂久邇文庫蔵写本「古寫太平記」十三冊(古典研究会叢書 第二期(国文学)、汲古書院、昭和四十七年)は所謂「神田本太平記」が底本であるが、これも「名越」に読み仮名は振っていない。

(25) 原田幹校訂「東海道名所圖會」(日本名所圖會刊行會、大正九年)及び、粕谷宏紀監修『新訂 東海道名所図會』(ぺりかん社、二〇〇〇

一年)を参照した。

(26) 『角川日本地名大辞典14 神奈川県』(角川書店、昭和五十九年)参照

(27) ここを含めて、以下文章中の一部文字の黒太文字化については、総て筆者による。少々お見苦しい点はお許しいただきたい。

(28) 筆者は昭和九年発行のものも確認したが、当然ながら基本的に同じである。ただし、昭和九年発行のもの「坂」の読み仮名が「ザガ」となっているのは誤植であろう。

(29) 拙稿「黎明館所蔵「奄美史談」(写本)をめぐる一考察 ―特に「南島雑話」との関わりを中心に―」(『黎明館調査研究報告』第十八集、二〇〇五年)参照

(30) 前掲『さつま』の姓氏・『国史大辞典』(吉川弘文館、昭和六十年)・前掲『明治維新人名辞典』・前掲『鹿児島県姓氏家系大辞典』・大植四郎『明治過去帳』(東京美術、昭和十年)等を参照した。

(31) 内村氏の言によれば、周りから度々「なごえ」あるいは「なごし」と間違っ呼ばれるため、しまいには敢えて「なごや」ですと否定されない方もおられるとのことである。

(32) ここでは『薩陽武鑑』(尚古集成館、平成八年)を参照した。

(33) 『鹿児島県史料 名越時敏史料三』(鹿児島県歴史資料センター黎明館、平成二十五年)参照

(34) 拙稿「名越右源太等寄進石灯籠」について(黎明館だより)二〇一二年八月一日発行)参照

(35) 『鹿児島県立図書館所蔵 郷土貴重資料目録』(鹿児島県立図書館、平成十二年)参照

(36) 『鹿児島県史料 名越時敏史料二』 鹿児島県歴史資料センター黎明館、平成二十四年) 及び、野田敏夫校注『鶴戸詣道の記』(鶴戸神宮社務所、昭和五十一年) 参照

(うちくらあきふみ 本館調査史料室長)